

## 酒井三郎の「世界史学」に基づく歴史教育構想 —1950年代後半、『世界史の再建』に先立つ見解—

向野 正弘

### はじめに

酒井三郎（1901-1982）は、戦前の複雑な教員資格制度と教育制度とをかいくぐり、教師として、研究者として生きた方である<sup>1</sup>。戦後、熊本において「世界史研究会」を組織し、世界史の研究・普及に尽力した<sup>2</sup>。酒井の世界史教育論の興味深いのは現代を中心に据えた視点であり<sup>3</sup>、当時の歴史教育界に受け入れられたものとは言い難いけれども、「世界史」教育の限界を突こうとして興味深い。また「世界史」教育の転換点に位置する今日にあって、示唆に富むものと考えている<sup>4</sup>。

酒井の歴史教育領域の代表的な著作は『世界史の再建』（吉川弘文館、1958）である。ただ該書を含めて総合的に論じる段階にはない。先だって公表された「世界史学についての私見」（日本書院版『歴史教育』3-7、1955、以下「世界史学」と略す）と「歴史教育に関する意見」（同 5-6、1957、以下「歴史教育」と略す）は、自身の志向を率直に記している<sup>5</sup>。ただ筆者からみると、酒井の論はやや錯綜しているように見え、整理し直さないと理解しがたい点がある。ここでは、筆者なりに整理し直して、酒井の歴史教育構想の概要を検討したい<sup>6</sup>。

---

<sup>1</sup> 拙稿「一歴史教員の半生と文検観—酒井三郎の足跡と『《高等教員・中等教員》文検西洋史《系統的》研究法』の考察—」（『歴史教育史研究』3、2006.10）

<sup>2</sup> 拙稿「世界史研究会の歩み—酒井三郎を中心とする戦後の世界史研究活動—」（『総合歴史教育』44、2009.1）参照。

<sup>3</sup> 拙稿「日本における世界史の萌芽をどのように考えるか—酒井三郎・木崎良平の見解を手掛かりに—」（『立正西洋史』23、2007.2）

<sup>4</sup> 拙稿「今、なぜ酒井三郎か？—『国家の興亡と歴史家』に至る歩みと今日的課題—」（酒井三郎著・青木信家・石塚正英・川島祐一・鈴木正弘・中島浩貴編『国家の興亡と歴史家〔復刻・解題〕』北樹出版、2010.11）において、今日の状況に対して「歴史学からの『世界史』の検討を求められているはずである。そうした観点から酒井の世界史論を検討しなければならないであろう」（「Ⅶ 漂流する「世界史」への灯」p.176）と提起している。

<sup>5</sup> この2篇の間には、約二ヶ年の間があり、特に後篇「歴史教育」は、病床にあって「加筆訂正の機」のあることを念じている。したがって、完備した見解ということではないことに留意する必要がある。

<sup>6</sup> 酒井は「入試」や「教員養成」についても見解を表明しているがここでは論じない。

## 1. 酒井三郎の「世界史」認識をめぐって

酒井三郎の「世界史」認識はどのようなものか。行論の関係上、筆者の断片的な検討の結果を述べておこう。酒井は基本的に網羅主義の立場に立たない。また外国史を世界史とは見なさない。酒井は、歴史叙述に現れる世界認識の発展史として、自身の世界史を位置付けようとしているように見える。

たとえば『国家の興亡と歴史家』（弘文堂書房、昭和18年〔1943〕9月20日発行）「Ⅱ. 神の国の没落」は、『旧約聖書』におけるバビロン捕囚に関わる記述をなしたイエレミヤについて論じる。

イエレミヤは「すべてを知り、すべてを主宰する神、ヤーウェの意志に従って、世界は動いてゆく」（Ⅱ. 1. イエレミヤの時代と環境）〔記述は旧版、新編集本 p. 46〕ということを確認する。この瞬間、神は世界性を有し、現状を世界的な視野で見なければならない局面に立ち至る<sup>7</sup>。

酒井は、歴史学を思想・哲学に隷属させる立場を取らない。歴史学には歴史学独自の発展があると見る。この点は重要な点であり、やや私見を加えておこう。世界史は、形而上学と密接に関係する。形而下から形而上へと結ぶような位置付けにある。したがって、世界史を論じる際には、思想の問題を無視することはできない。しかし思想そのものではない。人類の発展とともに、旧来の思想では対応できず、限界を超える新しい世界認識が展開されることとなる。そうした世界認識の発展の歴史として世界史を構想しようとしているように感じるのである。

## 2. 酒井三郎の歴史教育に対する覚悟

酒井三郎は、論述に当たっての立ち位置を「わたしは自由に一社会科のワクから離れて一ものをいうことにする」（「歴史教育」p. 84）と述べる。つまり以下に述べる内容は社会科「世界史」の現状に捕らわれるものではなく、時に現状に対する批判と改善の方向性を含むことになる。

酒井は「歴史教育の目的は果されているか？」（同前）という問いを立て、自身の見解を、

歴史は人類の過去の姿であるから、それを素材として現代および将来の人間のあり方をきめ、それに近づくべく人間の育成をすること、それが歴史教育であると。  
（同前）※下線筆者。なお引用はできるだけ元の表記を尊重した。以下同。

と述べる。ここで「現代および将来」に関心を有していることを確認しておくべきで

---

<sup>7</sup> 拙稿「酒井三郎の確信—『国家の興亡と歴史家』における歴史家像—」（『立正西洋史』27、2010. 10）参照。

あろう。

次に歴史教育の担い手について、

歴史教育はあくまでも教育（実際）家の仕事である。彼は歴史家の提供する素材を、彼の人生観・世界観をとおして体形づけ、そして彼の未来の理想に結びつけ、かかる理想を目標としてそれに近づけるべく被教育者に影響を与えるのである。これは一人にして双方を兼ねるものもあるが、概して歴史家と教育者との共同作業と見るべきである。（「歴史教育」 p. 85）

と述べる。一見妥当な見解のように見えるが十分実現できていることかという疑念がある。酒井の場合は、この理想の実現のために世界史研究会を組織した。この共同作業は、なかなか難しいもので、

（筆者補：過去に対する偽り、素材の誤りなどに対しての）正しい形とは、なにを標準としていうのか。人間が次の世代の負担者たる人間を育成するという意識にくもりを持たぬことである。要するに歴史家もまた教育者も、真理のために闘い、真理のために死ぬるという信念をもたぬかぎり、歴史教育の目的は果されないであろう。（同前）

と述べる。「真理のために死ぬるという信念」というのは、戦争をくぐり抜けてきた方らしい覚悟の上になされていることだということが理解される。ただ教師一般に求められることかという点で難しい。苛立ちが垣間見える。そして、

歴史教育ということは、過去の知識をやたらに注ぎ込むことではない。発展段階説をうのみにさせることではない。人間がいかに生きるべきかという目標をしつかりと掴ませて、それに一步でも近づかせる実践への意志を養うことである。いふところの実践とは、赤旗をふってスクラムを組むことだとのみ解釈してはならない。（「歴史教育」 p. 86）

と述べる。注入主義を否定し、唯物論の発展段階説を否定し、歴史教育を「いかに生きるべきか」を探究するものとする。さらに、

要するに歴史教育の真髄は、深い人間的考察と広い社会的視野とのうえにたつて、理想に近づくための実践に、人々をすすめることである。実践にはしかしながら思慮を必要とする。近視眼的であってはならぬ。人間の善意が往々にして認められぬということは、悲しいことである。歴史教育では、列強のカラクリや政治家の陰謀を知り、ペテン師を暴露するとともに、善意を善意としてすなおにうけいれる雅量をもたなければならない。その知恵を歴史家は授けてくれるであろ

う。(同前)

と述べる。「歴史教育の真髄」として「深い人間的考察と広い社会的視野」とを掲げる。戦時の反省に立てば、「列強のカラクリや政治家の陰謀を知り、ペテン師を暴露する」というのは当然のように感じるが、それだけでは十分ではなく「善意を善意としてすなおにうけいれる雅量」を歴史家に求める点に酒井三郎の歴史学者としての見方の深さと歴史教育者としての穏当な立ち位置とが良く表れている。しかし研究者として見た時にはどうだろうか。危うさを感じる。

### 3. 戦後の社会科「世界史」の回顧と現状認識

酒井は、戦後の社会科「世界史」発足時の状況を回顧し、

…(略)…戦争の終わった後に課せられた世界史には、定義が与えられなかった。  
従って人は多くの場合 東洋史+西洋史=世界史と見てきた。(「世界史学」  
p. 23)

と述べる。成立期の「世界史」は、当時の人々にとって、わかりずらく、曖昧な科目として立ち現れ、一般には「東洋史+西洋史=世界史」という図式で理解されたとする。そしてその結果として、

あの当時(筆者補:戦争の終わった後)、あたえられた時間内に、広範囲の地域と長年月にわたる内容とをあつかうべく余儀なくされて、生徒とともに茫然自失せざるを得なかったものは、わたしのみの経験ではあるまい。(同前)

という状況を招来したとする。ここに指摘する状況は、今日に至るまで、「世界史」について回る宿痼というべきものであり、結果として、

…(略)…実際教壇で、あたえられた時間内に、現代史にはいりうる教師がいく人あるであろうか。しかももし現代史の学習がなされなければ、社会科のねらいは不徹底となることはいうまでもない。(同前)

という状況を招来したとする。現代史にこそ社会科「世界史」の「ねらい」があるとすれば、現代までたどり着かない「世界史」というのは、課題の多いものということとなる。

このようにして戦後十余年を経過し、社会科「世界史」にとって新たな課題が浮かび上がってきた。まず当初の社会科「世界史」の任務を、

思うに終戦後、世界史の課せられた任務は多方面であった（註2）が、要は民主的  
社会における正しい人間関係のあり方を歴史的に、しかも広範囲にわたって考  
えさせ、われわれを戦争にまで駆りたてた狭い国家主義的過誤を再びくりかえさ  
ないようにするためであった。（同前）

と確認し、その上で現状を、

そのことは、まことに重要なことであって、戦後教育の眼目であった。日本史を  
はじめ社会科の諸科目が、ほぼ同一のねらいをもったことはいうまでもなく、社  
会科がいわばあらゆる教育計画の中心的地位を占めたのも、この故であった。し  
かるにこのことは、現在もなお必要であり、いなくとも必要である。なんとなれ  
ば、今や戦争の惨禍が多少とも脳裡から薄らぎつつあり、平和社会建設の念願が  
だれてきているからである。かかるさいに社会科の諸科目が選択であることは、  
前記のねらいを果すのに力が弱く、いわば社会科を存置しながら画竜点青を忘れ  
たものであるといわねばならない。（同前）

と述べる。朝鮮戦争に伴う特需景気をへて高度経済成長へと向かおうとする時代相に  
あって、惨禍の記憶が薄れ、平和社会建設の念が「だれてきている」と指摘する。

#### 4. 「世界史学」について

酒井は、世界史における現代史の徹底しない原因を、

…（略）…わたしのいわんとする点は、日本史に対立するところの外国史の同義  
異語である世界史では、社会科世界史の意義は半減するものであるということだ  
る。（同前）

と述べ、さらに、

…（略）…不徹底の大きな理由は世界史そのものにある。東洋史プラス西洋史す  
なわち世界史であるという規定こそ、もつとも根本的な癌といわなければならない。  
い。（同前）

と述べる。現代史の本質と関わる主張である。未来予測、世界認識の転換は、日本人  
にとって、日本の現実を離れてはあり得ない。つまり「東洋史＋西洋史＝（世界史と  
いう名の）外国史」では現代史はありえない、ということになろう。東洋史・西洋史  
そのものを批判しているのではなく、その二つを合わせた網羅主義の外国史を「世界  
史」と称していることを批判するのであり、こうした「世界史」の構造上の問題を解

決しなければ、現代史は意義付かないということになる。

それではどのようにすべきか、というと、酒井は、網羅主義の世界史（外国史）に対して、「世界史学」に基づく「世界史」を提起する<sup>8</sup>。ここでいう「世界史学」とはどのようなものであろうか。酒井は「世界史学」について、

世界史学とは世界を対象とした歴史学である。世界とは宇宙の一遊星としての地球をさすにしても、それはその表面に生活する人間の社会を考えての地球である。人類の生活をつづける場所としてのそれであって、人類社会の生活を意味しない世界は、われわれのばあいには考えられない。かくしていうところの「世界を対象とする」とは世界に住まう人間の社会生活の発展を対象とするものということになる。（「世界史学」p. 19）

と述べる。「人間の社会生活の発展を対象とする」ということは、社会科「世界史」の考え方と通じるものであろう。

ついで、

（筆者補：日本史・東洋史・西洋史の三分野は、それぞれ特殊の研究領域をもっている）これに対し世界史学は東洋・西洋、あるいは日本の、それぞれの歴史の発展の共通な面をとりあげて、世界の共通の史的問題をとりあつかうものである。したがってそれは史学一般と考えてもよいものである。（「世界史学」p. 20）

と述べる。歴史学は基本的に個性追求の学であり、日・東・西の各史はそれぞれ「特殊の研究領域」を有す。対して「世界史学」は、「特殊の研究領域」を有すものではなく、歴史発展の共通面、共通の史的問題を取り扱うものとする。

さらに、

世界史学は、しかしながら、必ずしもいわゆる日本史・東洋史・西洋史のたんなる総合ではない。かつて行われた万国史ではないのである。そして日本史のある

---

<sup>8</sup> 「世界史学」の主張は、史学史の潮流の中で、日本の歴史学史、歴史教育史のなかで、しばしば語られてきたものらしい。著書としては、戦前に鈴木成高『ランケと世界史学』（弘文堂〔教養文庫〕、1939）が刊行されている。ランケに発する歴史観の延長線上に位置するものと思うが、ここでは論じる段階にない。またその後もしばしば見受ける語で、たとえば吉田悟郎『自立と共生の世界史学—自国史と世界史—』（青木書店、1990）は、「世界史学はもとより、世界史という学問、知識が今日のアカデミーの世界では公式に認知されていないことは確認しておかねばなるまい。世界史というものは、今日までのところ、高校の一教科か、出版物の一ジャンルに過ぎないものである」（「はじめに」p. 3）と述べて、自身の壮途の意義を強調している。吉田の「世界史学(的方法)」は、アカデミズムにおける日東西に対する批判の基礎としており、一見すると、酒井の見方とは異なる。現状では、こうした動向を体系的に論じる段階にはなく、拙論では、あくまでも酒井三郎の提唱する世界史学の意味で、カギ括弧を付けて表記し、論じていくこととする。

断面は、世界史的問題としてじゅうぶんに意味をもつものであり、東洋史・西洋史においてもまた同様である。かくして日本史即世界史であり、東洋史・西洋史それぞれすなわち世界史でありうるといった世界史学をわたしは考えている。奇異に聞えるけれども日本世界史・西洋世界史という使い方は、かかる立場から生ずるものであらうと思う。（同前）

と述べ、

…（略）…しかしわたしは思う。われわれの世界史は網羅することではないと。民族の中には世界史のなかにどうしてもとりあげなければならぬ有意義のものもあらうし、人種の標本として以外に意義のないものもあらう。またとりあげ方によって、有意義になってくるものもあらう。いずれにしても大して意味のないものもあるであらう。（「世界史学」 p. 22）

と述べる。まず網羅主義の「世界史」や万国史を否定し、日本史であっても「ある断面」は意味を持つといい、「日本史即世界史」、「日本世界史」も成り立つとする。なお東洋史・西洋史も同じである。さらに有意義となるか、ならないかの要点は「とりあげ方」にあるとする。ここで留意すべきは、日本史・東洋史・西洋史を基礎に発想している点である。この三つを温存して「世界史」を構築しようする点に限界を感じる。

酒井はさらに、

さて教科としての世界史と学問としての世界史学とは二つの途ではない。歴史そのものがちがうのでなく、ただ目標の異なるところからくる程度の相違である。したがって一般教養の点に重きをおくところの中学校でいう世界史的内容、もしくは高等学校の世界史も、社会科の一環として、その学習をおし進めてゆく場合、学問としての世界史学と乖離するものではないことがわかるであらう。（同前）

と述べる。「学問としての世界史学」と「教科としての世界史」の同質性を指摘し、さらに社会科としての高校「世界史」、中学校における世界史的内容も「学問としての世界史学」と乖離しないとする。なお中学校における世界史的内容については、やや微妙な揺れを表明しており、この点は後述する。

## 5. 現在ならびに未来の取り扱い

社会科「世界史」においては、現代史が重要であるとする。しかし歴史学は現代さらに未来の取り扱いに慎重である。酒井は、

いうまでもなく、歴史はもともと過ぎさったものをとりあつかう。したがって未着 (aussethen) の部分ともいうべき、動いている現在および将来を問題にすべきでないといわれる。（「世界史学」 p. 20）

と確認し、さらに、

…（略）…いわばわれわれは、つねに過程のうちにある。過程のうちにあつて、なお未着の部分を見とおしてものをいうということは、むずかしいことで、決定的な回答を与えることは無理である。いきおい相対的な、あるいは一面的な見込みが存するだけである。（同前）

と述べる。現代史は、通常の研究領域を有す日本史・東洋史・西洋史の歴史学の取り扱う範囲を逸脱しているということになる。酒井は続けて「それにもかかわらず、過程のうちにあつてものをいかなければならないのは何故であろうか」（同前）と問題提起し、

過去の人の生き方を考えるばあい、現代のわれわれがこれをなすのである。われわれは、われわれの生活から離れて彼らの生き方を考えるのではない。そこで過ぎ去った完結したと思われる過去は、実は現在につらなっているのである。過去を判断し、現在を考えると、将来の生き方に必ず想いいたるのが常である。（同前）

と述べる。不可知なものとして、一見すると切り離して考えている「現在および将来」は、実は過去と連なっており、過去を判断する際に、将来を考えているとする。

酒井は歴史叙述の背景にある現代認識の特質について、

歴史のとりあげ方が、常に現在のわれわれの立つ立場から離れることのできないことは、すでにアウグスティヌスにも見られ、マルクスにも見られるところであった。世界の中に生きるわれわれは、現代世界の危機を身に切々と感じつつ、それがわれわれの世界史学を構成することに影響することは、どうしようもないのである。（「世界史学」 p. 21）

と述べる。現代世界に対する危機意識が歴史の取り上げ方、歴史叙述に影響を与え、さらに「世界史学」に影響を与えるとする。ここでは、アウグスティヌスとマルクスとを例示するが、現代を生きる歴史家、酒井三郎にとっても同様だということになる。酒井自身は、現代を、

現代人はおそらく、今日のわれわれの生活がノルマルであり、スタビルであると



考えているものはないであろう<sup>9</sup>。まして理想的であると考えていない筈である。現代の不安、それを多くの現代人は意識する。これはとりもなおさず危機観につらなり、未来の理想社会に望をかけることになる。（「世界史学」 p. 20）

と述べる。現代に対する不安があり、未来に理想社会を描く。現代史叙述の核をなす部分である。現代に対する不安は取りも直さず未来に対する不安である。これを理想に転じるための営為と言うことになるろう。

## 6. 「世界史学」から見た歴史教育構想

酒井は「世界史学」の立場から、当時の社会科「世界史」に対して、

わたしはすでに述べたように、世界史学は国史学・東洋史学・西洋史学の共通の問題をひろいあげて、これを処理し研究するものであり、万国史が世界史でなかったごとく、日本史+東洋史+西洋史が世界史ではないと思うから、いま行われているような世界史を排斥する。（「世界史学」 p. 23）

と述べ、また、

ところでわたしは、世界史学を、上に見てきたように考えるからして、社会科世界史の現在のあり方に対し賛成ができない。そしてこのことは、いきおい社会科の他の教科目にも及ぶものである。（「世界史学」 p. 22）

と述べて否定的である。そして自身のイメージする構想を、

わたしの見解の結論を先に出すならば、高等学校社会科の科目のうち歴史に関するかぎり、学科を選択にすることなく必修とし、日本史・東洋史・西洋史（それに人文地理を課することは必要であると思うが）を学習し、最後に世界史を課するということである。これはいわゆる社会科の目的（註1）を果す上からも、世界史のもつ意義を拡充する上からも、好ましいゆき方でないかと思うのである。（「世界史学」 pp. 22-23）

と述べる。日本史・東洋史・西洋史・人文地理の学習の上に（世界史学に基づく）「世界史」を構想しようとする。

後に示されることとなるが、この構想は授業時間の確保という点に難点がある。しかし個性探求の学としての歴史学習を放棄して（世界史学に基づく）「世界史」を構

---

<sup>9</sup> 「ノルマル」は、標準的なこと、正常なこと。「スタビル」は、安定したことを指す。

想することには危惧すべき点があり、

といて、例えば発展段階説の方式をとくだけでは、歴史的な理解をさせたとはいいがたく、またじゅうぶんな理解も困難であろう。ここにおいて、まず日本史・東洋史・西洋史の内容を提供し、しかる上に世界史に入ることが適当ではなからうか。（「世界史学」 pp. 23-24）

と述べる。「発展段階説の方式」つまり唯物史観に基づく一面的な理解に危惧の念を表明している。また、

ひとはあるいは、日本史的世界史、もしくは西洋史的世界史だけをやることをすすめるであろう。範囲も狭く、理解するだけの時間もじゅうぶんにあたえられるであろうというかもしれぬ。しかし現在の段階において、そうした世界史が——成立は可能であるとしても——うまく叙述されているであろうか。また教師がよくこれをなしうるであろうか。（「世界史学」 p. 23）

と述べる。「日本史的世界史」「西洋史的世界史」だけをやることは、一見合理的なようにみえる。しかし未開の分野であり、叙述と教師の実践面に危惧の念を表明している。

また、中学校「歴史」における「世界史的視野」「世界史的内容」について論じている。この語の示す内容は「日本史と並立するところの外国史以外のなにものでもない」（同前）とし、その価値を認めつつも、酒井のいう「世界史学」に基づく「世界史」とは異なるものとし、「高次の世界史は無理である」（同前）と断言する。そして中学校「歴史」における「世界史的視野」「世界史的内容」といっている内容に対して「「世界的」あるいは「外国史的」といったものの使われることを希望する」（「世界史学」 p. 23）と述べている。

酒井は「世界史学」に基づく「世界史」について、

けっきょく、わたしは従来の日本史・東洋史・西洋史の上に世界史を課することによって、以上の欠陥を救いうるものと思う。すなわち三つの歴史の材料を駆使しながら、とりわけ（地球上の）世界の各地が共通の運動を転回してゆく時代から以後に重点をおいてとりあつかうならば、社会が望んだねらいに到達することができるように思う。（同前）

と述べる。つまり日・東・西の三分野を一通り学んだ上に、三領域の知識を駆使して、特に世界が密接に関連する時代以後に焦点を当てて学ぶものということになる。

## 7. 歴史教育の大綱試案

酒井は、前節で検討した構想を、歴史教育課程の大綱試案として示す。その際に、

こと歴史教育に関しては、わたしは歴史家が、しかも教育に豊富な経験をもつ歴史家が、一貫した教育課程案を編成することが必要であると思う。（「歴史教育」p. 87）

と述べる。「教育に豊富な経験をもつ歴史家」とは、自身のことであり<sup>10</sup>、自身の経験と見識に基づいて、小学校から大学までを視野に置く歴史教育の大綱試案を提示する。

（1）小学校： 現在歴史という教科はない。社会科でよいと思う。…（略）…要するに歴史的なものの観方を授け、徒らに軽率な判断を下すことを避けるために、ものを深く、広く見てゆく修練をすることにある…（略）…六年にいつては社会の殆どすべてが史的問題を含んでいることは、小学校で社会科教材を調べたものの気付くところであろう…（略）…。そして六年では、さらに中学校に入つての日本史的教育の準備として、年代史のものにならしておくことも必要であろうと思う。

（2）中学校： ここではじめて日本史が学習される。そしてそれは年代史的歴史が取り扱われてしかるべきであろう。義務制の最後の三年に、自国の現代までの発展を知ることは、国民として必要不可欠である。…（略）…これに対して、ここでは世界史は不要である。不十分な地誌の知識しかもためぬ中学生に、世界各国の史的知識を授けることは、不消化に終る憂が充分であり、かつ本格的な世界史など、この時期に修得できるものではない。…（略）…

（3）高等学校： 日本史・世界史・人文地理等々の選択については、わたしは反対である。これらは高等普通教育——今そんな言葉は使われておらぬが——にとっては、いずれも必須の学科である。時間数を減じ、内容は変更しても、全学科を必ず課すべきだと思う。序ながらいえば、世界史などやる必要はない。外国史として東洋と西洋の歴史を課せば充分だと思う。高等学校の現状では、またそれ以上にでてはいない。

（4）大学の一般教育課程： ここにおいてはじめて世界史の教育がなさるべきであろう。そしていうところの世界史が、東洋史プラス西洋史でなくて、国史もふくめた、もっと本格的な世界史であるべきというまでもない。…（略）…重大なのは「世界性」である。世界性のない世界史、いわばつぎはぎだらけ世界史が、

---

<sup>10</sup> 酒井三郎は、小学校から大学に至るほとんどすべての年齢層の学校で教えてきた経験を有す。前出拙稿「一歴史教員の半生と文検観」参照。

高等学校などで行われていることは、ひとのよく知るところである。

(5) 大学の専門課程：ここで歴史学研究の根本問題が取り扱われるとともに、それぞれの専門が攻究されるであろう。但し特殊研究については、けっきょく、大学院においての研究になるだろう。(以上、「歴史教育」 pp. 87-88)

注目すべきは、高等学校において、「世界史」ではなく、「外国史として東洋と西洋の歴史」を必修として課し、大学の一般教育課程において、(「世界史学」を基礎に置く)「世界史」を位置付けようとする。

酒井の「世界史学」に基づく「世界史」教育の構想は、高校までの教育課程に納まるものとはならなかった。一つには「世界史」を日本史・東洋史・西洋史とは異なる、より高次の学として措定した結果といえる。その結果、一見すると、高校の教育課程を日・東・西の三分野体制へと引き戻そうとする保守的な主張とみえる。しかし戦中の日本中心主義に絡め取られた世界史構想などの反省に立つならば、堅牢な実証主義に学としての基盤を有す日・東・西の三分野体制こそが間違いの少ないものということになる。酒井には、戦中の歴史教育の反省に立つ慎重な志向があったと考える。

## 8. 酒井三郎の隘路

すでに見たように、酒井は歴史叙述には、「常に現在のわれわれの立つ立場から離れることのできない」ものがあるとする。酒井自身も、自身の現実から逃れることはできなかった。酒井の構想が前節のようになった背景として、以下の三点を指摘できると思う。

### 1) 歴史教育とアカデミズムの歴史学との連続性・一体性の認識：

当時は、歴史学としての、世界史としての「東洋史」「世界史」の枠組みは強固であり、戦前においては、連続する一体のものであった。そうした中で育ち、学んできた基礎は、捨てがたいものであり、アカデミズムの歴史学の世界に生きている酒井にとって、捨てるような主張は現実的ではなかったであろう。

### 2) 的確な現状認識と悲観的な未来予測：

「教育に豊富な経験をもつ歴史家」である酒井は、教師として初等から高等に至る様々な教壇に立ってきた。加えて熊本では、教員の巻き込んだ研究会を組織していた。知りすぎており、結果が見えてしまうということである。自分ならできる。しかしそれを一般の教員に求めることができるだろうか。酒井は「善意を善意としてすなおにうけいれる雅量をもたなければならない」という。酒井には、自身にできるからと言って他者に押しつけるように主張することはできなかったであろう。

### 3) 系統的歴史知識の呪縛：

酒井は「歴史教育ということは、過去の知識をやたらに注ぎ込むことではない」と言う。よく見ると注ぎ込んではいけないと言っているのではない。酒井のいう「世界史」は日・東・西の系統的な知識の上にしか成り立ち得ないものだったのである。少

なくとも歴史領域の未来予測は、歴史的な探求の結果として導き出されるものであり、核となる系統的な歴史知識を有さなければ導き出し得ないものと見るべきであろう。

この三つの制約を踏まえて「世界史」を位置付けるには大学の「一般教育課程」とせざるを得なかったのである。しかし酒井の構想した時代からすでに60年以上が経過している。歴史学・歴史教育を取り巻く状況は大きく変わっている。酒井は「従来の日本史・東洋史・西洋史の上に世界史を課する…（略）…すなわち三つの歴史の材料を駆使」（『世界史学』p.23）すると述べている。すでに「東洋史・西洋史」という体系は形骸化している。今日、アカデミズムの外国史領域の研究は、地域研究を枠組みとしており、「東洋史・西洋史」という枠組みを越えた世界史的な把握を試みようとしているように感じる。

また今日の歴史学は、柔軟で多様な構造を採るようになり、一方で歴史学の基本が軽視されているように感じる。酒井の言う「史学一般」である。さらに大学の教育は、教養部を放棄してしまった。このように酒井が構想した基礎はすでに失われ、変質化してしまっているのである。

## 9. 現代の「世界史」教育への示唆

一方、歴史教育、「世界史」教育は、大きな岐路に立っている。2022年度より、「歴史総合」（2単位必修）「日本史探究」（3単位選択）「世界史探究」（3単位選択）の三科目体制となる。これらは、ある面で酒井の言う「日本世界史」「西洋世界史」などの考え方に共鳴するように感じる。酒井の提起を柔軟に取り入れて、生かすこともできるのではないだろうか。

### 1) 「世界人」としての世界史的教養：

酒井は、世界史的教養の必要性を、

将来の国民が多少とも世界史的教養をもった世界人として活動しなければならぬ場合に、日本史だけの知識ではもの足りないことを、早くから考えていたわれわれは、たとえそれが外国史的のものにしる、そうした内容を加え、広い立場にたって日本史を見るということに喜びを禁じ得ないのである。（『世界史学』p.24）

と述べる。ここで「世界人」の語を用いているのが印象的である。この箇所は中学校の「世界史的視野」に関する箇所であり、世界史的教養と広い立場にたって日本史を見ることの重要性を確認している点は、日本におけるアイデンティティ形成の課題において重要な指摘であり<sup>11</sup>、今日においても揺るがない課題としてよいであろう<sup>12</sup>。

---

<sup>11</sup> 拙稿「“世界史”教育で全球化認同の培養—日本《世界史》教科書的目標—」（中文）（邦題：『世界史』教育におけるグローバル=アイデンティティの育成—日本の『世界史』教科書の目指して

## 2) 未来予測に基づく現代史：

現代の歴史学習の要点は「課題」（問い）にあるという<sup>13</sup>。

酒井三郎の見解には、「課題」（問い）を設定する糸口があるように感じる。歴史教育は、現代そして未来を視野に置く。これは専ら過去を研究対象とする歴史学と大きく異なる点であり、現代に対する不安と、未来に対する期待を内包するような「課題」（問い）とすべきであろう。酒井は「現代の不安」の一例として「原子爆弾」を例示している。デモクリトスのアトム説から説き起こし、「学問的要求から真理の発見に精進した」（『歴史教育』p. 85）結果であり、「歴史家はこの人類の遺した業績とこれに貢献した人々をたたえねばならない」（同前）とする。「しかしそれが広島や長崎の悲劇を見たのは、何故だろうか？」と問い、「これこそ歴史家の調査しなければならぬものであった」（同前）と述べ、人間の矛盾した性格を論じていく。

整理すると、①悲観的な予想（未来）、②そうした予想をさせる理由・出来事（現代）③この出来事に至る経過（歴史）④悲観的な予想を改変しようとする動き（現代）。というようなプロセスを想定できよう。私見では、歴史教師は、「予言者」であって良いと思う。しかしその「予言」は改変可能なものであって、改変するのは現代・未来を生きる生徒諸君ということになる。

## 3) 「世界史学」探求の史的研究：

酒井の指摘する歴史教育とアカデミズムの歴史学との一体的な理解は、「世界史学」を共通の課題として、検討すべきもののように感じる。アカデミズムの歴史学には、地域研究に細分化した実証的歴史学の成果をどのように束ねるべきか、という課題がある。

酒井は、歴史学を思想・哲学に隷属させず、歴史学独自の発展を重視した。この立場は堅持されるべきだと考える。酒井は「世界史認識の発展史」として世界史を企図した。史学史的な文脈を踏まえて構築するのも一つの可能性を内包しているように感じる。

さらに言えば、様々な論者によって、これまでに構想されてきた「世界史学」の考え方や構想について検討していく必要があろう。「世界史学」探求の史的研究から見えてくるものは今日的な課題を解く鍵となるに感じている。

---

きたもの一」（余偉民・劉昶主編『文化和教育視野中的国民意識』上海辞書出版、2012）は、戦後「世界史」におけるグローバル＝アイデンティティの育成の視点の概要を論じたもの。

<sup>12</sup> 国民にとって必要な「世界史的教養」をどのようなものと見るかは、一考要す課題と考える。近年の語記批判と用語精選の主張には問題が多いと考える。筆者は、近年の学会会議を絡めた高大連携に連綿の議論に否定的な見解を有す。用語に関しては「精選」に名を借りた新たな「暗記」用語の提案の問題点—高大連携歴史教育研究会編「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」の「世界史」領域案について、特に中国明代を事例として—（『教育社会史料研究』13、2018. 4）など参照。なお私見では、地誌や文学、科学など多様な視点を絡めて検討する必要がある。

<sup>13</sup> 茨木智志「地理歴史科歴史の学習」（中平一義・志村喬・茨木智志編著『中等社会科教科教育研究—社会科・地理歴史科・公民科—』風間書房、2021）p. 133

## おわりに

酒井は、将来を視野に置いて現代を重視し、東洋史・西洋史をあわせた「世界史」という名の外国史を批判し、「世界史学」の視点から日・東・西の歴史を見直すなど、社会科「世界史」の有す志向と共鳴しつつ独自の論を展開した。しかし酒井の「世界史学」に基づく「世界史」教育構想は、アカデミズムの歴史学との一体性、旧来の西洋史・東洋史の枠組みの尊重、教師の実態の尊重などの結果、高校の社会科「世界史」の範疇に納まるものとならなかった。しかし歴史学・歴史教育の置かれている状況は大きく変わっている。現代において、その示唆するものは新たな意義を有していると考ええる。